

2016 年 4 月 6 日

先生の筆跡

なつかしき夏書の墨の匂ひかな (蕪村)

時差ボケで深夜に目が覚め、眠れなくなったので百間の文章を読んでいたら、漱石のまねをして執筆時に前掛け（前垂れ）を使用したという話があり、以下のことを思い出した。

昔、K 先生の講義を受けていた学部学生の頃、先生は黒板にチョークで数式を書きながら、時折しばらくためらうように手を止め、書道の運筆練習のように字を少し離れた位置から眺めてゆっくりと書き進めることがあった。もともと絵の才能のある先生だから、個々の字体に微小な乱れがあっても、全体として出来上がった数式をみると、まさしく芸術的であった。その数式の表す物理的な内容と姿がみごとに調和しているように見え、この量はこの記号でなければぴったりに表現出来ないという、抜き差しならないものがあつた。頭の回転が速すぎて筆がついて行けない物理学者に非常な悪筆の人がいるが、先生は自分の板書の細部にまで気を使っていたようである。それ以来、私は板書の機会には先生のまねをすることにした。

何年か後、ポスドクとして留学させて頂いた先の研究室の指導者 E 先生の筆跡も独特であつた。E 先生は国の重職を兼務されていたので多忙を極めておられた。週に一度の面会時間は先生の部屋の入り口ドアに貼り付けた週間予定表の空欄をみつけて名前を記入するとアポイントがとれたというルールになっていた。何しろハードなスケジュールなので空スロットは少なく、出遅れるとその週の面会予約がとれなくなり 1 週先送りとなる。ようやくとれた研究相談の時間に部屋に行くと、まず前室の秘書のいる部屋に通され、隣室にジャンジャンかかってくる電話が済むのを待たなければならない。いくつかの電話の話し声が切れたところで漸く面談可能となる。先生は身辺を整えるようにレポートパッドとボールペンを机の上にまとめてポンと軽くたたき、研究にスイッチが入れ替わったとみるや、すさまじい勢いで数式を書き始めるのである。偏微分方程式、積分方程式、行列、場の微積分など非常に難しい数学計算を、自分が開発した独特の演算法---すべてある種の代数演算に頭の中で変換する方法---を駆使して行き詰まること

なく最後まで計算をおこない、答えを出してしまう。そのあいだにレポートパッドは一冊尽きてしまい、激しい数式の筆跡だけが残る。答えは精確さには欠けるが、また、符号や数因子などはほぼでたらめになってしまうが、しばしば正解の近くをヒットするので、まことに油断ができない。その散らばったノート紙片を一週間かけて追跡するのが、いつのまにか私の仕事になっていた。

あるとき、大きな問題が解けたように自分では思えたので面会時間に相談すると、普段はあまり使用しない背後の黒板を使って、先生は証明のための数式をチョークで板書し始めた。夏の初めで、その年に町の公園や、郊外の芝生で異常発生した greenfly という空中をとぶ黒い小さな羽虫が窓から次々に飛び込んでくる。先生も私も顔中 greenfly に這い回られながら議論を続けた。やがて”Proved!” という叫びとともに証明が出来上がった。黒板には様々な方向に勢いのある数式が並んでいる。大きな黒い瞳が高く上がった形の良い鼻の上の眉の奥の方でやさしく微笑んでいる。頬には無数の greenfly が這い回っていた。

また、何年か後、専門誌の編集長をされていた S 先生の手紙を受けて論文を共同執筆することになった。その手紙の署名サインが右上がりの、少し癖があるが素晴らしいバランスの遠近法の字で書かれていた。原稿を送るたびにかなりの部分の英文を直して下さったが、すべて手書きの文章を紙片に記して私のワープロ原稿に貼り付けてある。その中の数式の姿が書道でみられる運筆に似て素晴らしい。万年筆でも油性ボールペンでもなく、どちらかといえば水性ボールペンに近いような柔らかいが陰影の深いタッチで、簡潔に削り込んだ文章の正鵠さを数式で完結させるような筆致であった。私は投稿までにその論文を 7 回書きなおした。

冒頭の蕪村の句には長い前書きが付いている。夏書^{げがき}（酷暑にお堂にこもり、ひたすら写経を続ける修行）を一緒にした友人（故人）の写経——実は発句であるが——の文字の放つほのかな墨のにおいを思い出し故人を懐かしんだ追悼句である。私は日焼けした紙の上の古い手書き数式を見るたびに、かけ出しの頃のことを思い出す。

3 人の先生は今もうこの世にいない。